

母なる大地との共生

ナタリア・サラサール（在日ボリビア大使館臨時代理大使）

2022年9月29日

2021年4月、ボリビア多民族国は、世界の国民と社会運動、国際社会、国内および国際組織に「われらが母なる大地（パチャママ）との再邂逅」を呼びかけました。

この邂逅では、私たちは死の文化ではなく生命の文化を守り、破壊の文化ではなく補完の文化を守り、病気の文化ではなく健康の文化を守り、商品の文化ではなく生き物の文化を守らなければならないということが再確認されました。

私たちは、人間だけでなく、パチャママ（母なる大地）に住むすべての存在からなる偉大な家族の一員であることを再び感じるために、母なる大地との一体感を取り戻さなければならないのです。

私たちは皆、温室効果ガスの排出削減、消費と生産の在り方の変更、富及び権力の蓄積と集中の論理の転換、母なる地球の存在を兄弟姉妹や家族としてではなく、資源や商品として想定する論理の転換を含む、統合的解決法を見つけるために協力する義務があるのです。

ボリビアでは、アンデス・アマゾンの文化圏では、母なる大地は権利を持つ生きものと考えられています。この観点があるからこそ、私たちは、人間と自然との間の均衡を最適化し、自然をあらゆる生命の母であり父であると認識した、領域との関わり方の痕跡を全領域に見出すことができるのです。

このような世界観は、功利的で単純化された文明的な自然モデルによって体系的に弱められ、自然を人間文明の維持のための単なる資源源におとしめられ、その結果、気候変動、森林破壊、生物多様性の大量喪失と消滅、土壌侵食と砂漠化、地球の自然循環の変化など、地球上の生物が依存する自然体系の安定性に深刻な危機がもたらされています。

この文脈で、ボリビア多民族国は、我々の祖先の知恵を現代に適合させるために様々な取り組みを行ってきました。これは、「安寧に生きる」の概念に具現化されている新しい文明モデルの基礎を形成するため、地球を我々がその一部であり、必ず権利を有する生物であると認識しています。

しかし、その努力にもかかわらず、人間活動が生命体系に与える影響はますます深刻になっており、生命体系の安定性と人間社会を維持する能力を近未来でも、著しく脅かしています。

人間だけでなく、私たちを取り巻く自然にも生きる権利があることを意識しなければなりません。すべての生き物の生存と均衡が、私たち自身の生存を保障することができるのです。

地球が私たちに属するのではなく、私たちが地球に属するのです。私たちの使命は、自らの権利を守るだけでなく、そこに生息するすべての生物に対して責任を持つことです。

共通の家への回帰は、国内外を問わず、すべての機関、議員、社会運動、裁判官、公務員、地域社会、大学、そして私たち一人ひとりに課せられた課題なのです。

私たちは、国際関係のあらゆる分野で、母なる地球を守り、その認識と権利の擁護を促進するための政策を発展させる義務があります。この意味で、私は皆さんにこのことに関し、一員となって、共に働くことをお勧めします。

私たちは、母なる大地と先祖代々の調和のとれた関係を再開しなければならないと確信しています。これは、失われたパチャママとの均衡を再構築し、最終的にパチャママと調和して生きることができるようになるための、人類としての最大の挑戦なのです。

私たちは、母なる地球が直面している複数の危機に対する認識を高める、非市場的・非資本主義的アプローチに基づく、気候変動に対処するための真の解決策について対話し、考えることが重要であると考えます。この点について、副大統領のダビッド・チョケワンカ・セスペデスは、「安寧に生きる」と「母なる大地の権利」を認識するための公開書簡を発表しましたので、以下に紹介します。

(手紙の朗読 - 日本語の手紙の本文を紹介します。)

ハヤヤ